

34アヤで解らなかったところを、辻さんが説明してくださいました。

「タゴシにこさば」は、手輿し(タゴシ)で白い凝灰岩の石を運ぶさまを、ツキの明かりが照らして、さも、ヒトではなくてカミが運んでいるようだ。モモソヒメの不思議な話に人々は仰天して、月明かりの夜まで石運びをやめなかったのですね。

(イクメのキミの10年、つまりアスス630年、ハシハカが作られました。西暦245年ではあるまいか？ 大雨の西暦127年を、アススの512年に対応の基準にして)

「ミククルミタマ」は、用水池を作る必要性を説くための、祭祀だったのです。

神憑りの風潮が蔓延した時代なので、論理では納得してもらえないので、祭祀で世論を作ったのです。ちなみに美具久留御魂神社の丘は、用水池を見渡せるころでした。狭山池周辺を用水池で灌漑をする画期的な開発です。(34・62)時に、ミマ

アスス 671	西暦286	崇神天皇51 奈久佐浜宮	西	75	62				61	171
アスス 672	西暦287	崇神天皇52	西	76	63				62	172
アスス 673	西暦288	崇神天皇53	西	77	64				63	173
アスス 674	西暦289	崇神天皇54 名方浜宮	西	78	65				64	174
アスス 675	西暦290	崇神天皇55	西	79	66				65	175
アスス 676	西暦291	崇神天皇56	西	80	67				66	176
アスス 677	西暦292	崇神天皇57	西	81	68				67	177
アスス 678	西暦293	崇神天皇58 御室嶺上宮	西	82	69				68	178
アスス 679	西暦294	崇神天皇59	西	83	70				69	179
アスス 680	西暦295	崇神天皇60 宇多秋宮	西	84	71				70	180
アスス 681	西暦296	崇神天皇61	西	85	72				71	181
アスス 682	西暦297	崇神天皇62 ため池を掘るミコトノリ	西	タラカシマ	86	73	ー	タタネコ	72	182
アスス 683	西暦298	崇神天皇63	西	87	74				73	183
アスス 684	西暦299	崇神天皇64 伊賀・隠の市守宮	西	88	75				74	184
アスス 685	西暦300	崇神天皇65	西	89	76				75	185
アスス 686	西暦301	崇神天皇66 穴穂宮	西	90	77				76	186
アスス 687	西暦302	崇神天皇67	西	91	78				77	187
アスス 688	西暦303	崇神天皇68	西	92	79				78	188
アスス 689	西暦304	垂仁天皇1 11代イクメ即位	西	93	80				79	189
アスス 690	西暦305	垂仁天皇2 伊賀・敏都美尊宮	西	94	81				ミマキビノイカシコメ	

キのキミ(崇神天皇)の62年(アスス682年)の事でした。タタネコ73歳、ヲヲカシマ86歳で世論の誘導に長けたころと言えましようか。

ちなみに、タタネコの育った陶荒田神社と、狭山池は直線距離で2kmほどのすぐ近くです。

稲作耕地の展開

イサナギ・イサナミさん

ニニキネさん

低湿地↓微高地(井堰)↓丘陵地(用水池)

ミマキのキミ

この新展開が、古墳時代の真相だった！

世論形成の母体の変遷

カミの世
指導者層
↓
ヒトの世
一般人

「縄文哲学」
↓
神憑り

35アヤ、ヒホコきたる スマヰの アヤ

(11代垂仁天皇の3分割のひとつめ、一部崇神天皇の時代の記事)

元年35・1 トキ(時)は、アススの689年のネヤエのハル(春)の事でした。11代のイクメのキミが即位なさいます。

ムツキ(1月)のツアト(14)がツイタチ(1日)で、ヲミエ(15)の、つまり1月2日に。イムナ(実名)のヰソサチさんは、御歳42にてアマツヒツギ(天皇位)を受け継がれました。イクメイリヒコのアマキミと名乗られます。即位の式の翌日には、カサリ(式典の設え)をタミ(国民)に拝ませる事、恒例の常の如しでした。ヲヲカシマ93歳、タタネコ80歳でした。

イクメのキミ(垂仁天皇、ヰソサチさん)は、生れ付きにして素直なお方でした。ころ、ホツマにしてオコリ(驕り)なき誠実さであられました。昔、夢見に、

「ミモロエに ヨモにナワはス

ススメおふ」ホ34・30 (ニニキネさんのお気持ち)

と言う、おココロでありましたことから、お世継ぎに定められたのでした。

ちなみに、お兄さんのトヨキイリヒコさんの夢は、

「ミモロエに キ(東)にむきヤタビ

ホコゆけし」ホ34・30

そのゆえに、トヨキイリヒコはホツマをさめよ(東国の宇都宮の二荒山神社)

元年35・3 1年(アスス689年)のアキ(秋)に亡き父君の遺体をお送ります。フコ(冬)にご陵にお納めますのでした。(カンナ(10月)の11日に、オモムロ(遺体)をや

マハ(天理市柳本町、山辺道勾岡上陵)にお送りしてお納めするのでした。(34・66)

ハハのミマキヒメは79歳でして、ミウエキサキとして尊びます。また、オオハハ(祖母)のイカシコメ(イキシコメ)さんは189歳でして、尊びます。

35・4 2年(アスス690年)キサラキ(2月)にサホヒメさんをウチミヤ(正皇后)にお立てになりました。新ミヤコは、マキムキ(桜井市巻向)のタマキのミヤにお遷しになりました。

シハス(12月)にサホヒメさん(開化天皇の子のヒコイマス)のなかなか、お言葉を出されないミコ(皇子)でした。(今に言う発達障害でしょうか?)



ミマナ(カラ)から、ソナカシチが来朝します。ミツギ(上納品)の献上と、イクメ

のキミの即位を祝賀する使いでした。ヲランキミ（イクメさん、垂仁天皇）は、ミマナのキミにと、ソナカシチに賜物を授与します。五色で彩られたカツミネ・ニシキ（北海道産の錦織物）のアヤ（綾織物）を、モモハ（百反）の多くでした。シホノリヒコが、お供をしてノホリ（幟（のぼり）旗）を立てて送って行きまして、ミマナとのミチ（国交）は開いていったのでした。

357 3年（アスス690年）のハ（1月）になりまして、シラキ（新羅）の帰化人のヒホコの子孫のモロスケをトミ（臣）に召しました。

ヒホコのミヤケモノ（土産物）の8品は、タシマ（但馬、兵庫県豊岡市出石町、出石神社）に納めておいたのでした。

8品は、以下です。

- 1、ハホソ
- 2、アシタカ
- 3、ウカカタマ
- 4、イツシ・コカタナ
- 5、イツシ・ホコ
- 6、ヒカガミ
- 7、クマノ・ヒモロケス
- 8、イテアサのタチ

さて、その、シラギのヒホコの来歴は、ミツカキのヨ（崇神天皇）の39年（アスス659年）に遡ります。（ミマナのツヌガラシトが敦賀へ来朝したのは、アスス678年）シラギの方が先に来朝していたのでした。19年前に。

諡号等		アスス	在位年数	年齢	出	来	事
十一代垂仁	六五九	三九	九〇	アメヒホコ、ハリマにて勅使に訊かれる。（35-9） ヤヨイミカ（三月三日）、アマテルカミを祭る。（36-17） ムツキスヘヤカ（二月二十八日）、クニカタヒメ、イカツル（チヨギネ）を産む。（34-28）			
	六六〇	四〇	九一	ハツソカラアエ（二月十日）、トヨキミとイクメキミとに夢をみるべとのミコトノリ。（34-28） ウソコカツミエ（四月十九日）、キソサチをヨツキミコ、トヨギイリヒコをホツマツカサとす。（34-31）			
	六六八	四八	九九	ハツキ（八月）、ケキオオカミを詣でにミユキして、ツヌガラシトに逢ひて召す。（34-33）			
	六七八	五八	一〇九	フツキソヨ（七月十四日）、ミコトノリ、タケヒテルのカンタカラ、イツモにあるをみまく欲し。（34-49）			
	六八〇	六〇	一一一	イツモフリネ、キイリネを殺す。（34-53）			
	六八一	六一	一一二	秋七月二日、ため池を掘らんとてクワマノミヤにミユキなる。（34-61）			
	六八二	六二	一一三	ツノガラシトにミマナの名を給る。（34-38）			
	六八三	六三	一一四	シホノリツをミマナヲシとする。（34-47）			
	六八五	六五	一一六	フツキ（七月）、ミマナ、ソナカシチしてミツギなす。（34-63）			
	六八八	六八	一二九	十二月五日、キミコトキレテ、モノイハス、キネマスコトシ。（34-65）			
	六八九	元	四一	春一月二日、イクメイリヒコ（キソサチ）アマツヒツギを受け継ぐ。（34-65・35-1）			

359 ミツカキのミヨ（ミマキのキミ、10代崇神天皇）の39年（アスス659年）の事でした。ヒホコは、来朝してハリマ（播磨、兵庫県南西部）から、シシアワ（兵庫県宍粟市か？）に至るのでした。この時に、オオトモヌシと、ナガオイチが聴聞使に使わされて、ヒ

ホコに問います。ヒホコは答えます。

『わたくしは、シラキ（新羅）のキミのアコ（最も継承者に近い人）です。名はアメヒホコと言います。弟のチコにクニを譲って、ヤツカレ（わたくし）はヒシリのキミ（垂仁天皇）にマツロイヌ（教えを授けてもらって帰化したい）と強く望みますのです』

オオトモヌシと、ナガオイチがこの次第をイクメのキミ（垂仁天皇）に報告しました。イクメのキミは、国内への居住を許可なさいますとおっしゃいますのです。

『ハリマのイテサムラ、また、アワチ、シシアワの所について、居住を認めます』

このことを受けて、ヒホコは、さらに願いをします。

『居住のご許可のこと有り難うございました。』

さて、そうしたら、もうちょっと諸国の各地につきまして見聞を広めるために巡りたいのです』

イクメのキミは、これも許可なさいますのです。

アメヒホコは、ウチカワ（宇治川）を遡ってアワウミ（琵琶湖）に出ます。アナムラ（湖東の鏡山近郊、苗村神社、滋賀県竜王町綾戸。または、草津市穴村町の安羅神社、か？）に滞在して、さらにワカサ（若狭）を巡ってタシマ（但馬）に住まいしました。兵庫県豊岡市出石町宮内の出石神社は天日矛を祭ること有名です。供のスエヒト（陶器職人）はハサマタニ（狭間の谷あいのことか？）にそれぞれ、定住が出来ようになったのです。イスシ（出石）の有力者のフトミミの娘さんのマタオオを娶ったアメヒホコは、モロスケを儲けます。モロスケの子供がヒナラギです。ヒナラギはキヨヒコを儲けます。そしてキヨヒコはタシマモリを儲けるのです。（タシマモリは、ヤマトタケ（日本武尊）の妻のフトタチハナヒメのお父さんです）

35・15 4年（アスス692年）のことでした。サホヒコの反乱が起きます。

サホヒコは9代開化天皇の孫のタニハミチウシの弟でした。妹にはサホヒメがいて、サホヒメは11代のイクメのキミ（垂仁天皇）のミヤに入内していたのです。

さて、4年のナツキ（9月）、ツウア（23）のハ（1日）のヲナエ（45）、つまり23日でした。妹でキサキ（正皇后）のサホヒメに、兄のサホヒコが問うのです。

『兄とヲ（夫）と、どちらがよりあつか？（信頼できるか？）』

何の気なしにこう問われたサホヒメさんは、つい、

『お兄さんのほうでしょうね』

と、お追従かねがね言ったのです。

この言葉に、サホヒコはかぶせての籠絡に迫っていくのです。アツラウと言う古い言葉に表れています。当て込ませると言った感じが、現代風のそんな雰囲気でしょうか？

兄のサホヒコは、アツラウのです。

『ナンチ（あなた・妹）は、イロ（美しさ）で仕えて寵愛を得ているのであるが、やがては、イロもオトロヒテ（衰えて）くるのは目に見えています。その時は、メクミ（寵愛）は去りますよ。』

兄の私とのきずなは、そんな脆（もろ）いモノではないです。長くくしのつながりです。

願わくは、思つのです、わたくしと、あなたと、ふたりして御代を治めて踏まば、より長き安眠の枕を得る事が出来得ましょう。

この、目標を手にしての実現のため、一肌脱いで頑張ってください。

それには、あなたなら、キミ(垂仁天皇)を容易く殺すことが出来得ます。おやりになって下さい。わたくしの為でもあり、あなたの為でもあります』

ヒホカタナ(細い小刀)を、兄のサホヒコが渡すのでした。

サホヒメは、兄の表情を見て、イナ(否・拒否)と言っても決して聞き入れることがないと悟りました。事の成行きにヒホカタナを受け取ってしまったサホヒメさんは、ナカコ(心の本心)はワナナキますのでした。

35・19

さて、ヒホカタナ。どうともしようにも袖の内に入れて悶々とする日々が続きます。サホヒメさんのお心には、発達障害のホンツワケさんのことも、心の重りとなっていたことでしょう。

そのうちにセミナツキ(旧暦6月)になりました。ハツヒ(6月1日)にクメのタカミヤ(久米御縣神社)か? 檀原市久米町。サホヒメさんの在所か?)に、イクメのキミがニコキ(行幸)あらせられたのでした。サホヒメはイクメのキミを膝枕に和ませます。さて、キサキのサホヒメは、兄からのアツラヒの話が胸に迫ってきます。『キミをシイ(殺せ)せよ』今この時こそが、その時だ。

サホヒメは、こう思った時に涙が溢れて来てポタリ、ポタポタと、キミ(垂仁天皇)の顔に滴(したた)ります。

イクメのキミは、夢覚めて、問うのでした。

『おかしな夢を見たんだ。イロオロチ(綺麗な蛇)が首に纏(まと)わりつづのです。

サホのアメ(小雨?)のようなものが、オモテ(顔)を濡(ぬ)らすのは何かのサガ(禍い)なのだろうか?』

この問いに、キサキのサホヒメは隠し得ないと悟ります。夢見の時代です。伏しまして、マロビツツ(うずくまりつつ、今の土下座)申し上げるのであります。

『キミ(垂仁天皇)のメクミも背き得ず、兄のことがあります。さて、兄の陰謀を告発すれば兄を滅ぼすことになります。

兄の企てを告げざる時は、国家の転覆をもたらす異常時になります。

どっちに転んでも、どうにも、為し行きようが有るわけでは御座いませんです。身動きの取れなくなって怖れ悲しみのチのナンタ(涙)です。

兄のサホヒコのアツラエの陰謀は、このところだったのです。キミの昼寝の膝枕のことでした。

このような事が、また、将来にも起き得るとしたら、ひょっとしての事で実際に行われてしまう場合もあり得るのかもしれませんが。このように思い考えますと涙がひたひたと滴(したた)るので御座いました。キミのお顔を潤せるものは、この事でございます。

また、おん(御)お夢のオロチ(小蛇)は、このヒホカタナ(細い小刀)の事で御座います。よう』

ヒホカタナを見たイクメのキミ(垂仁天皇)は、なるほどと納得なさいました。そしてクーデターに対応なさいます。チカガタ(近郊)にあるヤツナタ(のちにオオトモ・タケヒ)を召して、サホヒコを討たしめられたのでした。すでに、用意万端のサホヒコはイナギ(城砦)を作って強固に守りを固めていました。ヤツナタも攻めあぐねています。サホヒメは、悲しんで言うのでした。

『我たとい、ヨ(世)にあるとても、シム(為すところの力、および、血縁の人)枯れて何か面白いこともあり得ましようか』

サホヒメは、ニコ(皇子)のホンツワケ(アスス690年12月の誕生、満2歳6か月)

を抱(いだ)いてイナギに入ってゆくのです。イクメのキミ(垂仁天皇)はミコトノリをおっしゃいます。

『キサキと、ミコを出すべし』

ですが、サホヒコは応じませんでした。ヤツナタ(のちのタケヒ)は火攻めに取り掛かります。火がイナギを包みゆく時に、ミコのホンツツケを抱かせて外に出します。そして、イクメのキミに言上するのでした。

『兄のツミ(罪)を逃れようとして、イナギに入ったのですが、わたくしも共にツミのあることを悟って知りました。たとひ、ここにマカレト(死んでしまっても)ミメクミのこととは決して忘れることは御座いけません。』

後のキサキのお定め的事に、タニハミチウシ(サホヒメの兄)の娘をと、願ひ上げます』

キミが、サホヒメの遺言をお聞きになりまして、火の穂は大きく上がりシロ(イナギ)は崩れたのでした。人々は逃げ去って、サホヒコもサホヒメも亡くなったのでした。

イクメのキミは、オオトモのヤツナタをお褒めになって新たな讃(ただえ)名のタケヒムケヒコ(オオトモのタケヒ)を授けられました。

3530

7年(アスス695年)フツキ(7月)の1日に、「モツミの子のツツキ・タルネの娘さんのカハイ・ツキヒメをキサキに立てられました。妹の、カクヤヒメもウチメの位で入内になりました。コトホギ(お祝い)に、初めてのタナハタのカミマツリをお祝いなされるのでした。(綴喜郡、今の京阪奈丘陵のあたり、城陽市に水主神社、樺井月神社。カハイツキヒメは、ヤマトヒメをお産みになります。そして早世されます)」

3532

さて、カ比ベの事が興ります。のちに言う相撲です。あるトミが、キミに告げます。『タエマ(二上山東麓、葛城市当麻)のクエハヤが大力(おおちから)で、カ比ベをしたと、常に言っています。チカネ(千金?)を伸ばす事が出来。ツノ(角)を割く事が出来ます。カナユミ(金属弓)を作って、ツマにも常に床語りです。この、カナユミを踏み張るわがオオチカラをヨ(世)に比べたいものだ。カ比ベをせずにして、このまま、亡くなってしまつのは如何にも辛い』

その、クエハヤの嘆きぶりは、イクメのキミ(垂仁天皇)にまで聞こえてきたのでした。イクメのキミは、おっしゃいます。

『それならば、クエハヤに比べる力持ちは何処かにあるうものであるか?』トミは、答えます。

『イツモ(出雲)にノミのスクネが居ます』

ナガオイチに問はしめたところ、ノミのスクネも大喜びでカ比ベをしたいと言うのでした。そして、ノミのスクネはミヤコに上って来ました。イクメのキミも、喜ばれるのでして、早速に明日にでもカ比ベをすればどうか?とミコトノリされるのでした。

3535

チカラ・クラフル(カ比ベ)のカミのノリです。(当時でのさらに昔にも、前例があったのでしよう)

スマサのサト(桜井市穴師、相撲神社)にハニワ(土俵)を作って、カミのノリ(古い時代の作法)で設えます。

タエマのクエハヤは、キ(東)から上ります。ノミのスクネはツ(西)から上ります。さて、取り組みが始まりますと、ノミが強くて圧倒してゆきました。終にはクエハヤのワキ

(脇)と腰も踏み折って勝負がつきました。

イクメのキミは、ウチハ(団扇・うちわ)を上げてトヨマセ(どよます・喝采を上げる)しました。見物のトミ達も勝利を讃えて喝采を送ります。しかしクエハヤは、ここに絶命したのでした。カ比での負けてのミマカリ(亡くなり)は、本人のたつての希望でもあったのでした。(勝っていれば、ノミのスクネの財産を得たのでしよう)

クエハヤのカナユミは、ノミのスクネが貰い受けることになりました。タエマ(当麻)のクニもノミが受け継ぎます。クエハヤの家屋敷については、クエハヤのツマが相続しました。継ぎを為したるノミのスクネはユミトリの栄誉をも得るのです。